

令和 6 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K02250

研究課題名（和文）カンボジアの移住労働が子どものwell-being環境に与える影響の分析

研究課題名（英文）Analysis of the Impact of Migrant Labor on Children's Well-being Environment in Cambodia

研究代表者

島崎 裕子（Shimazaki, Yuko）

早稲田大学・社会科学総合大学院(先端社会科学研究所)・その他（招聘研究員）

研究者番号：90570086

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、カンボジアにおける貧困層の親の出稼ぎ移動によって子どもにもたらされる影響と社会的保護の関係を分析することにあった。研究成果からみえたことは、親の移住労働の負の要素が子どもに強く現れ出る世帯には、いくつかの点が指摘できた。それは、集落や居住地域内の社会的ネットワークが乏しく社会関係資本へのアクセスが極めて低い状況や、兄弟姉妹の養育の為に年長女兒の修学機会に影響を及ぼす実態、さらには、成人養育者の不在による子どもの不安定な保護状況の関係などが指摘される。したがって、「子どものWell-beingと子どもの社会的保護の状況は相関関係」にあると結論づけることができる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

移動者らとその家族に聞き取り調査を行い、具体的に捉えた結果から、家族の移住労働が子どもに与える影響を分析した。それらは、移住労働世帯の子どもの社会的保護のありようを分析するにとどまらず、移動を通じた貧困世帯の社会包摂の体系化を可能とした。これらの調査結果は、メコン河流域諸国内において今後想定される移住労働、ならびに脆弱な立場に置かれた人びとの家族移動に関連する対策に有効な視点が提示できると考える。

研究成果の概要（英文）：The objective of this study was to examine the relationship between social protection and the impact of migrating parents in Cambodia on their children. The findings identified several factors that contribute to the negative effects of parental migration on children.

These include a lack of social networks and access to social capital in villages or migrant community areas, the fact that older girls' schooling opportunities are affected by the care of their siblings, and the unstable protective status of children due to the absence of adult caregivers. Therefore, it can be concluded that there is a correlation between children's well-being and their social protection status.

研究分野：開発学

キーワード：カンボジア 子ども 移住労働

1. 研究開始当初の背景

急速な経済成長を遂げているカンボジアでは都市部を中心とした乱開発や地域格差により、稼得を求め移住労働を選択する人びとが後を絶たない。カンボジアの国内および隣国を含めた移住労働の影響はメコン河流域諸国、さらにはアジアにおける開発の影響を大きく受けている。カンボジアは、外貨投資による開発政策、ならびに中国の一带一路構想のなかで、経済のハブとして位置付けられている。そのことから、これらの結節点となる地域が社会的にも経済的にも大きな意味をもつようになってきている。2000年初頭から掲げられたアジア開発銀行による開発構想の影響による将来的な期待は、様々な先行研究からも指摘されていた(西口・西澤 2014, 廣畑・福代・初鹿野 2016)。同時に従来の予想をはるかに超える中国の経済投資の影響がカンボジア国内経済の経済を牽引し、縫製工場、国境にそびえたつカジノ、建設業といった分野からうかがえる。

それらの雇用は、必ずしも人々の安全を守る形態で行われているとは言い難い。国内の最貧困層は、乱開発の影響により、土地を奪われ、隣国タイに雇用を求め移動する人々もあとを絶たない。これらの人の移動のなかで情報を持たず安全な移動とは言い難い貧困層の人びとにはリスクが伴い、気づかぬ間に強制労働や最終的に人身売買に巻き込まれているという被害が発生している。従来のカンボジアにおける人の移動の研究では、農村から都市への人の移動や、世界市場における需要要因と労働搾取の現状等に着眼して、単身の移動者に対する人権擁護の視点から行った調査や分析、国際犯罪、法的支援といった研究が中心にあった(Bales 1999, Truong Thanh-Dam 1990, The Asia Foundation 2006, LSCW 2009)。しかしこの15年の間に、移動の多様化により、単身者の出稼ぎから子どもも含めた家族総出による稼得を目的とした移動や、夫婦のみの移動、親族呼び寄せ型など多様な形態の移動へと変貌を遂げている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現代的表現であるグローバリゼーションを通じて、脆弱な立場に置かれている人々に発生している現象を「人の移動」「家族」「子ども」「well-being」「脆弱性」「社会的包摂」というテーマで説明し、カンボジアにおける貧困層の出稼ぎ移動によって子どもにもたらされる影響と社会的保護の関係を分析することにある。また、本研究は、貧困層の「移動と社会環境」を多角的な視点から分析を行うことにより、開発研究、国際社会福祉研究、移民研究、人権研究、市民社会研究、平和研究の関連分野において新たな知見を模索するものであると考えられる。

申請者はカンボジアで15年にもおよぶ人身売買や女性の移住労働に着眼した研究をおこなってきた。しかし当該地域の人の移動を議論する際、子どもも含めた議論、特に家族の移住労働が子どもにもたらす正負の影響や、その経験を経た子どもの社会的影響への研究は十分にはなされていないとは言い難く、移住労働世帯の子どもの well-being といった社会環境に注視しなくてはならない現実が見えてきた。したがって本研究では、移住労働を通して、子どもの社会的保護、ならびに子どもを含めた世帯の Well-being を検討するにいたった。

本研究における Well-being とは、世界保健機関が (WHO) の定義に依拠し「健康とは、病気でないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされ、自己実現が可能である状態」と定義する。そしてカンボジア全体にもたらされている「移動」という現象を、人身売買などの被害にあいやすい弱い立場におかれた移住労働世帯の「子ども」に着眼することによって社会の周縁におかれた人びとの実態を捉え、カンボジアにおける全ての人にとっての安全な移動のあり方と、またその移動者とまたその家族の社会環境とはどうあるべきかを考察した。

3. 研究の方法

本研究は3年計画で展開し、文献調査ならびに参与観察、フィールドワーク/聞き取り調査を実施する計画であった。またフィールドワークは、年2回(雨期、乾期)のカンボジア農村、移住労働者が集まる集住地域(国境地域を含む)で実施することを計画していた。しかし、新型コロナウイルスの影響もあり、カンボジア農村奥地、ならびにタイ・カンボジア国境付近においての調査が困難な時期もあり、当初の予定よりも限定された地域での調査の遂行を余儀なくされた。しかし、同時に未曾有の事態が生じた時に、現在におけるカンボジアの出稼ぎが脆弱世帯にどのような影響をもたらし、移住労働にどのような変化をもたらすのか、といった点などを把握することが可能となった。

これらの調査では、現地の関係諸機関や、現地 NGO などの支援機関などの協力を仰ぎながら遂行し、国境地域などの治安が不安定な場所でのフィールドワークでは、現地の状況をより詳細に把握している NGO のスタッフ同行のもとに行った。個別聞き取り調査の方法では、村長、警察、教員、NGO 関係者などのキーパーソンへの聞き取り調査に加え、無作為抽出で住民を選定し、半構造化インタビューの手法を用いて農村住民や移住労働経験者、移住労働者、またその家族などへの聞き取り調査を行った。

本調査では、移住労働者が集まるスラムやコミュニティ、農村などで、越境の動態調査、社会環境、その影響に関連する調査の聞き取りを遂行した。さらに、国境に隣接する州(スバイリエン州)では、出稼ぎ状況や再統合の現状を分析するために、これらの州内農村において出稼ぎ経験者やまたその家族に対して聞き取り調査を行った。次に、世帯構成員の移住労働と子どもの養育実態を把握するために、首都のプノンペン、ならびに経済特区などへの出稼ぎ者が多いカンダール州農村において調査を実施した。

4. 研究成果

本調査では、①家族の移動プロセスや移住労働期間などの動態分析、②出稼ぎ家族らと子どもの経済・労働・栄養状況、養育環境、ならびに居住地域の社会環境調査、③移動／移住労働によって家族と子どもにもたらされる影響（孤立、排除、地域社会との関係、正負の側面）を考察し、④移住労働先、帰村した場合における社会的包摂のあり方（論理）を分析した。これらの研究成果からみえたことは、出稼ぎ世帯の子どもの Well-being と子どもの安全/社会的保護の関係についてである。

まず子どもが親の出稼ぎによって栄養状態や、養育環境を含めた社会環境の悪化などの負の影響を受ける世帯には、共通点が見られた。それは、集落や居住地域内に人的ならびに社会的ネットワーク（社会関係資本）へのアクセスが乏しい、あるいは欠如しているという点である。また、子どもへの養育支援が十分に行き届いていない世帯や環境においては、子ども自らが危険な労働や人身売買に巻き込まれる環境に身をおくリスクが高まっていた。

次に、子どもの学校教育における自身の意思に反した中退や退学の問題があげられる。従来から移住労働をする両親に代わって祖父母が孫を養育する事例は数多く見られてきたが、近年では、雇用形態の中・長期化や、子どもの養育者となる祖父母の高齢化に伴い、年長の子どもの祖父母と共に自分の兄弟姉妹の面倒をみるという傾向が、貧困世帯においては以前よりも強まっていた。具体的には、一番年上の女兒（長女）が 13 歳、15 歳といった年齢層の場合、学校を中退・退学し、家事労働に従事していた。また両親も、長女に養育を頼り、出稼ぎにでる傾向が強まるという相関関係もみられた。従来、国境地域の移住者コミュニティでは、NGO などが教育支援活動などを行っていたが、近年では、子どもの教育支援や、社会的支援などは限られ、社会的保護のネットワークは地域コミュニティにゆだねられているのが実情である。

さらに雇用形態の変化による子どもへの影響についてである。従来、みられた単発雇用（日雇い労働）から、越境労働であっても中・長期雇用契約へと変化してきている。その為、両親らは労働先やその近郊に居住することが多く、その世帯/家族に親（養育者）が不在になる期間が以前と比べて長期化している傾向にあった。そのため、子どもに養育を任せるだけでなく、養育者不在となる現実から発せられる、不安定な子どもの社会的保護環境や生活の質の低下などが浮き彫りとなった。なかには、両親とプチュンバン（カンボジアのお盆）やクメール正月のみに両親と過ごすという子どももいた。

上記に加え、調査を遂行するなかで当初の計画には入っていなかったが、移住労働者にもたらされた新型コロナウイルスの影響というものも見えてきた。それは、移住労働者世帯に経済的打撃をもたらすこととなった、雇用の打ち止め、強制解雇といった問題である。雇止めの対象になったのは、貧困層の 30 代女性に対する解雇の事例が少なくなく、稼ぎ頭となる年代の雇止めは、その家計に大きな影響を与えていた。特に貧困層においては、突如な雇止めは、家計の経済に打撃を与え、貧困度が強まる世帯も存在した。

以上、本研究を通じて、現地調査を通じたフィールドワークから研究分析を行うに限らず、英文書籍を通じて発表し、出版を通じて多様な角度から、分析を試みた (Yuko Shimazaki, "Considering the effectiveness and achievement of SDGs toward the combating of human trafficking, pp.133-145 (SCOPUS 掲載論文), Sustainable development disciplines for humanity: eds. Shujiro Urata and Kazuo Kuroda, Springer, 2023, Yuko Shimazaki, "Awareness of Public Actions Concerning COVID-19 in Cambodia", pp.219-232 (SCOPUS 掲載論文), eds. Noriko Suzuki, Masahisa Endo and Susumu Annaka, Public Behavioral Responses to Policy Making during the Pandemic, Routledge, 2023)。

引き続き研究の事例考察を行い、より社会包摂の論理について追及していきたい。そして、今後の研究の展開と応用へとつなげていきたい。移民研究の分野に限らず、地理学、政治学、難民研究と多岐に渡った研究分野において、以前にまして人の移動の研究が活発化し、様々な視点から分析されている。したがって今後は、メコン流域諸国地域との比較分析や、より一層、多様化かつ多層化する人の移動に関して、東南アジア全体にみられる現象を追求していきたいと考えている。

【参考文献】 The Asia Foundation (2006), *Review of a Decade of Research on Trafficking in Persons, Cambodia*, Phnom Penh: The Asia Foundation, Bales, K.(1999), *Disposable People*, Berkeley, University of California Press., Galtung, Johan (1975), *Peace: Research · Education · Action- Essays in Peace Research Volume one-*, Copenhagen: Christian Ejlertsen, LSCW(2009), *Unsafe Migration and Trafficking*, Cambodia, Phnom Penh: LSCW, Sen, Amartya K. (1999), *Development as Freedom*, New York: A. Knopf, Oxford University Press., Saskia Sassen (2001), *The Global City: New York, London, Tokyo*, Princeton University Press., 廣畑伸雄・福代

和宏・初鹿野直美,「新・カンボジア経済入門-高度経済成長とグローバル化」日本評論社,2016年、西口清勝・西澤信善
(編著)「メコン地域開発とASEAN共同体」晃洋書房,2014年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Yuko SHIMAZAKI	4. 巻 Springer
2. 論文標題 The Impact of Climate Change on Vulnerable Families in Global South in Asia	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 Climate change issues and social sciences: Towards carbon neutral society	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 Yuko Shimazaki	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 187
3. 書名 “Considering the effectiveness and achievement of SDGs toward the combating of human trafficking, pp.133-145 (SCOPUS掲載論文), Sustainable development disciplines for humanity: eds. Shujiro Urata and Kazuo Kuroda	

1. 著者名 Yuko Shimazaki	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Routledge	5. 総ページ数 270
3. 書名 “The Consciousness of Public Actions Concerning the COVID-19 in Cambodia”, pp.219-232 (SCOPUS掲載論文), eds. Noriko Suzuki, Masahisa Endo and Susumu Annaka, Public Behavioral Responses to Policy Making during the Pandemic	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------